札幌市教育文化会館情報誌「らく」 2016年5月発行

vol. 40

らく

sapporo
education and culture hall
news
raku

Tamoi Hiromichi X Yamagami Yukihiro

Traditional Trial

Noh-Kyogen+
6.22wed.

［対談インタビュー］

創生劇場

「Traditional Trial ～能、狂言プラス～」

観世流シテ方能楽師 田茂井廣道 × 現代美術家 ヤマガミユキヒロ

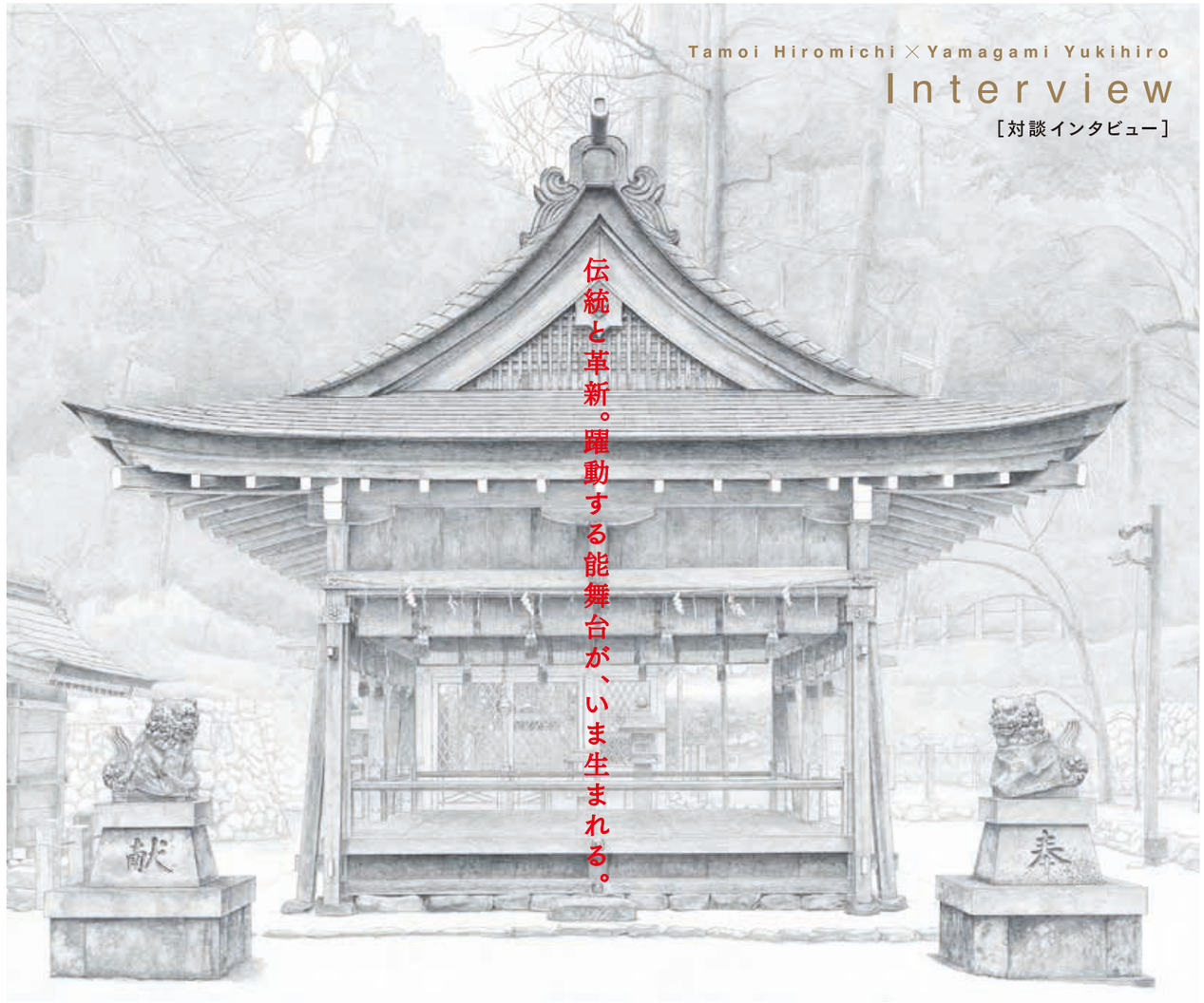
art by Yamagami Yukihiro

札幌市教育文化会館

Tamoi Hiromichi × Yamagami Yukihiro

Interview

［対談インタビュー］



伝統と革新。躍動する能舞台が、いま生まれる。

［観世流シテ方能楽師］
田茂井 廣道

1970年生まれ。田茂井廣和の長男。幼少期より河村晴夫、長じて13世林喜右衛門に師事。3歳で初舞台。現在まで『石橋』『乱』『道成寺』『望月』を披く。平成17年度より京都芸術センター主催の素謡の会のナビゲーターを勤める。子供から大人向けまで、様々な世代へのレクチャーを行うなど、多方面から能楽の普及に努めている。

田茂井廣道

能

×

ヤマガミユキヒロ

キャンバスプロジェクション

［現代美術家］
ヤマガミ ユキヒロ

1976年生まれ。2000年、京都精華大学美術学部を卒業後、京都を中心に現在まで多くの個展・グループ展を重ねながら活動。おもに鉛筆による絵画と同一地点から撮影した映像をキャンバス上で重ねあわせる「キャンバスプロジェクション」という独自手法による作品制作を続ける。

京都で生まれた、能と現代美術のコラボレーションが
さらにパワーアップして札幌にやってくる。
ふたつのジャンルを交差させるキーマンのおふたりに
お話をうかがいました。

能の「ライブ」感を最大限に引きだしたい

Tamoi Hiromichi

ヤマガミユキヒロ（以下Y） 僕は見えているもの（止まっているもの）を鉛筆による絵画として丹念に描き、その場にある時間の流れや光のうつろいを映像で拾い上げ、それを絵画の上にプロジェクションすることで合流させるキャンバスプロジェクションという独自の手法で作品を発表しています。最初に能とのコラボレーションのお話をいただいたのは2013年。僕はそれまで能をちゃんと観たことはなかったのですが、面白そうだと思い、即答でやらせてください、とお願いしました。最初の展示では絵画の中に能楽師が舞う姿をプロジェクションとして映しだしたのですが、次に京都芸術センターで行った展示では逆に、実物の能楽師の後ろに絵と映像がある、まるで絵画から能楽師が出てきたように、という形に発展したんです。

田茂井廣道（以下T） 私は同じ会場で別の演目に出ていて、その時にお会いしたのが最初でした。ヤマガミさんの作品と能の相性がとてもインパクトのあるものだったから、よく覚えています。通常、能舞台を映像に撮ったらそれは単に記録になりますが、ヤマガミさんの作品はとても「ライブ」感のあるものでした。絵の中で躍動する能の舞姿を観た時、いろいろな可能性を感じましたよ。

Y 能舞台って、昔は強い照明もなく、変化し続けるデイライトしかなかったでしょうし、春夏秋冬その時々の風景と一緒に観ていたんだろうと思うんです。映像と絵画を組み合わせる「キャンバスプロジェクション」は、一枚の絵の中に時間の移ろいを表現したくて生みだしたもの。僕の作品だったら、昔々の能の時間を立ちあがらせられるのではないかと思いました。映像を使った表現は、時間も空間も越える力を持っていますから。

T 夢うつつという言葉がありますが、能は観ていると夢か現実かわからなくなるような瞬間があります。ヤマガミさんの映像によって、そういった感覚がより強く感じられるかもしれませんね。

Y 能ってこの世のものでもあの世のものでもなく、また神様のようでも物の怪のようでもある何かが、時間と空間を越えて物語に登場する話が多いように思います。単に舞台美術になるわけでもなく、かといって能らしくなくなるのでもなく。観ている人が作品を頼りに想像力をより膨らませられるものにできればと思っています。

T 今回の舞台は、舞も謡も囃子も入り、本格的な能として、まず楽しめる。ただコラボレーションするのではなくて、すでに能のファンの方も、初めて観る方も能ってこんなに面白いのか、と思っていただけるものを作りたい、という方向性は最初から二人とも一致していますね。

Y 「よくわからないけど、面白い」ってことがあると思うんです。特に若い人には。僕は中学生の時にイギリスのパンクにはまって、ファッションも音楽もすごく好きだった。でも英語なんてわからないし、断片的な部分で魅力を感じていたんです。能と出会った時もまさにそうで、何を言っているかはわからないし、話の内容も知らないけれど、かっこいいという印象があった。今は能を勉強するなかでの物語の面白さに気づいて、その魅力を活かしたいと思っています。

T そもそも能は、現代の「ライブ」と同じなんです。観客と舞台が一体となって空間を楽しむもの。しかも今回の出演者は30～40代の実力派で、これだけのメンバーの舞台はなかなか観られません。能ならではの緊張感を共有する楽しさを、お伝えできればと思います。

創生劇場
「Traditional Trial～能、狂言プラス～」
6月22日（水）18：30開演　大ホール
料金／全席指定 5,000円 U-22席 3,000円
※U-22席は教文プレイガイドのみ取扱。身分証明書をご持参ください。
※教文ホールメイト、KitaraClub 全席指定4,500円

［チケット］
教文・大丸・道新各プレイガイドにて発売中
チケットぴあ（Pコード：449-682）・ローソンチケット（Lコード：13849）
※未就学児の入場はご遠慮ください。

時間と空間を超える映像の力は、能と相性がとてもいい

Yamagami Yukihiro

原作：W.シェイクスピア　翻訳：河合祥一郎　構成・演出：野村萬斎

札幌市教育文化会館 40周年記念プレ企画

マクベス

Macbeth

札幌公演

2016 7・1 FRI

撮影：滝谷征司

18：30開場　19：00開演　会場／大ホール

○チケット／教文・道新・大丸プレイガイドにて

全席指定 6,000円税込（教文ホールメイト会員 5,500円税込）

U-22席 3,000円税込（観劇時22歳以下対象。教文プレイガイドのみ取扱）

チケット発売開始　2016年5月1日（日）

教文プレイガイド　Tel.011-271-3355 9:00～19:00

休館日：毎月第2・第4月曜日（祝日の場合はその翌日）

作：ウィリアム・シェイクスピア　翻訳：河合祥一郎　構成・演出：野村萬斎　音楽監修：藤原道山

出演：野村萬斎　鈴木砂羽　小林桂太　高田恵篤　福士惠二

主催/札幌市教育文化会館（札幌市芸術文化財団）　共催/北海道新聞社

企画制作/世田谷パブリックシアター（公益財団法人せたがや文化財団）　後援/札幌市、札幌市教育委員会

『マクベス』は、私が1994年から95年にかけてロンドンへ留学していた時から、長らく構想をあたためてきた作品です。2010年の初演以来、再演を重ねて進化・深化を繰り返している『マクベス』が、このたび、初めて札幌の地に降り立つということ、大変嬉しく思っております。

原作では20名以上の人物が登場しますが、私の演出する『マクベス』では、出演者は5人のみ。マクベスとマクベス夫人、そして3人の魔女に焦点を絞りました。人間の営みの滑稽さに焦点をあてる狂言的な視点と、人間の精神性や情感に迫る能的な視点で「人間 対 森羅万象」の構図を浮き上がらせたい、という思いで構成・演出を手がけました。13年には、能・狂言の演出方法や小道具を取り入れて、更に「和」の美しさを引き出した『マクベス』をニューヨークとソウルで、さらに14年にはルーマニア・シビウ国際演劇祭とパリにて公演を行いました。各地で熱狂的、と言っても過言ではない大変熱い反応をいただきました。

そして今年は、シェイクスピア没後400年の節目の年です。4度目の上演となる今回は、マクベス夫人を映像や舞台で輝きを放つ鈴木砂羽さんに演じていただくことになりました。鈴木さんとは、NHK朝の連続テレビ小説『あぐり』以来の共演となります。どのようなマクベス夫妻を共に築けるか、是非ご期待いただければと思います。また音楽監修には音楽ユニット「KOBUDO-古武道-」でも活躍する、尺八演奏家・藤原道山さんをお迎えします。和楽器の生演奏も入り、装い新たに甦ります。

札幌は札幌市教育文化会館での公演や、毎年道新ホールで狂言を上演させていただいており、私にとりましても非常に縁のある土地です。イギリスの北部スコットランドを舞台とした『マクベス』、そして雪が浄化する世界観を織り込んだ私の演出作品を、北の大地札幌にてどのように道民の皆様に受け取っていただけるか、大変楽しみです。狂言公演の際には、いつも暖かい反応をくださる皆様には、私のもう一つの活動である「現代演劇の創造」を体現した『マクベス』もぜひご覧いただけましたら幸いに存じます。

PICK UP EVENTS［教文主催事業ピックアップ］

教文演フェス KYOBUN ENGEKI FESTIVAL 2016

毎年夏に札幌市教育文化会館がお贈りする演劇の祭典、通称「演フェス」。演劇を見たことがない人でも十分に楽しめる「短編演劇祭」を中心に、未経験者から経験者まで参加できる各種ワークショップも勢ぞろい！

［教文演劇フェスティバル 2016］

2016.7.30 土 ▶ 8.28 日

テーマ「レイ」

教文短編演劇祭 2016

予選　8月13日［土］（Aブロック14時、Bブロック18時開演予定）

決勝　8月14日［日］（14時開演予定）

2008年より始まり、どんどんパワーアップしていく「教文短編演劇祭」。道内外で活躍する劇団やユニットが集まり、2日間で各チームがトーナメント戦で戦います。毎年強豪揃いの熱いバトルが繰り広げられ、予選から大いに盛り上がります。決勝戦は昨年王者「東海連合」がシード参戦！ 全国から注目が集まるこの大会。今年も制限時間は20分。優勝者には、教文小ホール公演上演権などの特典が与えられます。

【大会の流れ】

昨年は、道外からの刺客団体「東海連合」がみごと優勝！ 新王者として初めての防衛となるか？ チャンピオンベルトは北海道に戻ってくるのか？ 今年も目が離せない！

教文大使 コネ・クートくん designed by ロケットデザイン

KYOBUN アート巡り 教文アートめぐり 6

国松 登（1907～1994）

Kunimatsu Noboru

函館の書画骨董などを商う家に生まれ、のちに小樽へ住を移す。二度目の上京で本格的に西洋画を学ぶ。昭和21年全道展創立に参加。以後戦後の北海道美術界の興隆に努める。昭和61年、紺綬褒章。同年、北海道新聞文化賞（社会文化賞）を受賞。

油絵・小ホール緞帳「北国」　［設置：1977年］

生活に根ざした、北のファンタジー

まだ雪が残る原野。夜明け前かのような薄暗さのなかにたたずむ幻想的な馬の姿、白鳥の群れ。山の頂には唯一の人工物がぽつりと屹立している。ありそうでなさそうな幻想的な風景を描いたこの絵には「北国」という名がつけられています。作者は戦後の北海道美術を牽引した国松登。文化への軍部の統制が続いた戦時中にも、くじけることなく絵画を学び、勇ましい戦争画がもてはやされるなか、自分の信じる美を描き続けました。自然とファンタジー性が融合した国松の作風は、荒れてしまった母国の山河にも人間との生活とのかかわりがあり、人と自然との調和のなかの美を表現しようとした、といわれています。「きびしい開拓の歴史と、いまを生き、未来にかける私たちの暮らしを、表現したいと思います」と国松はこの絵に言葉を添えました。齢70歳に近しい頃に描かれた原画は、小ホール入口に飾られています。

立川 佳吾から指名→

さっぽろ演劇人

No.007

谷口健太郎（たにぐち けんたろう）

「お祭り」のような存在でありたい。これからも、ずっと。

谷口健太郎 プロフィール

2004年に演劇集団「プラズマニア」を旗揚げ、演出・脚本・出演を務める。2010年、ソロ・プロジェクト「リリカル・バレット」で活動を開始。現在は深浦佑太との演劇ユニット「プラズマダイバーズ」で定期公演を行いながら、商業演劇の演出家・脚本家として活動中。

SAPPORO ENGEKIJIN

KENTAROH TANIGUCHI

時に東京でチケットが即座にソールドアウトする人気舞台の演出助手、時に大阪での定期公演に演出・脚本家として。着実に道外で仕事の枠を広げ続ける谷口健太郎、通称タニケンさん。よく台本を執筆したというカフェでお話をうかがいました。

――前回登場の立川さんとは？

「高校で始めた演劇で出会って以来、僕にとって唯一といっていい友人です(笑)。僕はもともと飽きっぽい性格で、たまたま始めたのが演劇だった。でも高3の時に観たTEAM NACSの舞台に驚いて。そのまま北海学園大学だけを受験し、彼らのいる演劇部に入りました」

――在学中にプラズマニアを立ち上げたのは？

「約1万人集客したTEAM NACSの舞台に立たせてもらった時、最初はとても嬉しかったんです。でも公演を重ねるうちに、この拍手は自分に向けてのものじゃないと気づいて悔しくなって。それまでまったく台本なんて書いたことはなかったんですけど、自分で書けば役者として声がかかるのを待つ必要がなくなると思って書き始め、劇団を立ち上げました。しばらく活動を続けたんですが、TEAM NACSの事務所に勤めることになり、一時休止状態になりました」

――そこでは役者として？

「おもにスタッフとして。まだまだ若手だったのですが、自ら名乗り出て全国公演にも演出助手として参加させてもらいました。はじめてのことばかりでしょっちゅう怒られていましたが、今振り返っても貴重な体験でしたね。でもやっぱり、僕がやりたかったのは裏方じゃない。それで退職し、プラズマニアを復活させて。900人集客した舞台も上演しました」

――東京進出のきっかけは？

「札幌で東京の演出家・御笠ノ忠次さんと組んで舞台を作る機会を頂いたんです。その後、彼の東京の舞台に立つことに。それまで、東京で芝居をすることに気負いがあったのですが、やってみるとなんだ、舞台の上ではどこも同じなんだと。それから積極的に自分で道を切り拓いていった感じですね」

――活躍の場が変わりつつありますが、タニケンさんの今後は？

「僕はずっと、演劇は『お祭り』みたいに楽しんでもらいたいと思っています。観た人の明日への活力になって欲しい。それはどこで作っていても変わらないし、ひょっとしたら演劇の枠を超えるかもしれない。いつかは武道館で興行してみたいですし(笑)。僕が先輩を観てすごい！と思った気持ちを、後輩の演劇人にも持ってもらえるくらいになりたいですね」

◎次回出演情報 | 劇団OUH旗揚げ公演「タイトル未定」脚本・演出
○日程：2016年5月4日(水・祝)　○場所：箕面市立メイプルホールにて

[撮影場所] 宮田屋珈琲レンガ館 Cafe 豊平店